

## ラルシュ・トロローリーでの黙想会

浅野幸治

2009年3月23日（月）から26日（木）まで、フランスのラルシュ・トロローリーでの黙想会に参加する機会をえた。正確には、23日の夕食から26日の昼食までの3泊4日であり、中心は24日と25日の2日である。この2日の中に、ジャン・バニエ氏の講話が3回（24日の午前と午後、25日の午前）とギャリ氏の講話が1回（25日の午後）あった。また24日の昼には、ラルシュ・ホームに招かれて、知的障害をもった人やアシスタントの人と食事をともにする機会も得られた。ラルシュ・トロローリーには、トマ神父がつくった「ラ・フェルム（La Ferme）」という祈りの家があって、そこでは常時黙想会が行われたり、個人黙想に来ている人がいたりする。私たちの黙想会もそこで行われた。

ラルシュのあるトロローリー＝ブルーユ村は、パリから東北に70キロほどのところにある寒村である。昔からある村らしく、昔の洗濯場が残っていたりする。主要地方道と思われる31号線沿いにはスーパーマーケットなどもあるが、村の中にはレストランが1軒あるきりである。おそらく昔は農業で生きていたのであろうが、今ではあまり産業もなさそうである。崩れかけた家や売りに出されている物件も少なくない。そういう村に、ラルシュ・トロローリーはひっそりと存在している。普通の民家と見分けがつかない。つまり、ラルシュ・ホームは普通の家なのだ。

ラ・フェルムは修道院のような所と言ってよいだろう。ただし多くの修道院と違って、小さい——収容人数は40人までであり、私たちがいたときには、20数人が滞在していたようである。寝室もそうであるが、食事が簡素であった。ただしフランスパンは非常に美味しくて、私たちはパンばかり食べていたような感じである。

ジャン・バニエ氏は、80歳である。私たちが知っているバニエは白髪の老人なので、昔の若いときのバニエの写真を見た場合のほうが私たちにとっては驚きなくら

いである。それにしても、バニエが最初に日本に来た1987年にはバニエは58歳だったわけだから、それからでも既に22年が過ぎている。80歳になるバニエが弱々しく見えるのも当然だろう。ただし精神は依然として元気である——言葉を思いだすのに時間がかかるということはなかった。

はっきり言って、バニエが講話の中で何を語ったか、私はあまり覚えていない。ビデオを見れば、思いだすだろう。けれども、バニエが言ったことはほとんどすべて、既に本で読んだり録音テープで聞いたりしたことのあることだったと思う。そういう意味では、新しいことはあまりなかった。

実は私はバニエの『人間になる』という訳書を2005年に出したが、その翻訳をしていた頃に次のような印象をもった。『人間になる』の原著は1999年発行である。もう1つの著書『すべての人には尊厳がある (Toute personne est une histoire sacrée)』（邦訳は『あなたは輝いている——ラルシュ・コミュニティーからの思索』佐藤仁彦訳、2008年）は1994年の発行である。この2冊を読み比べてみると、だいたい同じようなことが書いてある——ただ、旧著のほうがより大部で詳しい。『人間になる』は、『すべての人には尊厳がある』を基に、ラジオ講演用に短くして、しかもより整理されたものという印象をもった。

また、今回フランスに行くにあたって、その前に、バニエが1978年にオーストラリアで行った黙想会の録音テープ『Hearing the Cry』（全12巻）を聞いた。その時も、「30年前から同じことを言っていたのか」という印象をもった。要するに、バニエが言いたいことは同じなのである。もちろん、バニエが経験を積み、視野を広げ、考えを整理し、話すのが上手になるということはあるだろう。けれども、基本的な主張は同じ、ブレがないのである。

ただ、バニエの強調の置き方に、「ああ、そういうところが大事なのか」「そういう風に見るのか」というように、新たに学ぶ点があった。

それに関して2点を述べたい。1つは、社会の価値観とラルシュの価値観の対立である。バニエは社会の価値観を競争文化とも言うが、それは、他人との競争に

勝って地位や権力や財を手に入れることがよいことであり、それが人生を価値あるものにするという見方である。こういう競争文化の中では、必然的に競争の勝者と敗者がいて、競争に勝てない人間はつまらない、価値のない人間ということになる。言うまでもなく、知的障害をもった人は、競争に勝てないので、社会の片隅に追いやられる。しかし、ラルシュの価値観は違う。ラルシュの価値観では、人生の価値は他人との競争に勝つことではない。そうではなくて、人間関係、心の関係、愛の関係の中で生きることこそ、人生の意味はある。愛の関係とは、相手の人がいてくれることそのことを喜べるような関係である。言い換えれば、人間は生産を上げるための手段ではない。そうではなくて、人間のため、人間を生かすために、生産活動もある。そうでなければ、本末転倒なのだ。愛の関係とは、人間を、一人一人の人間をなによりも大切にするような関係である。

もう1つは、社会の価値観から解放されることの重要性である。ラルシュに働きにきた若い人たちは、知的障害をもつ人たちとの生活の中で、心の関係の中で生きる喜びを味わい、ラルシュの価値観を学ぶという。そのとき、若者の心は社会の価値観からラルシュの価値観へという移行過程にある。社会の価値観とは他人の判断である。それに対して、ラルシュの価値観は、若者が自分の心で感じとった人生の意味である。社会の価値観に強く縛られていると、自分の心が真に欲する生き方を選びとることができない。したがって、真に自由に生きるためには、社会の価値観（他人の判断）から解放されることが必要なのである。

もちろん、社会の価値観から自由になることは、難しい。社会で価値あるとされている多くのものを手放すことになるからである。独身主義をとるのでもなく、清貧を選びとるのでもなく、なおかつ社会の価値観から自由になることができるだろうか——それが私にとっての課題になりそうである。（豊田工業大学 准教授）

（付記 本稿は、日本キリスト者医科連盟『医学と福音』2009年5・6月合併号、48～50頁で発表したものである。）